

## キリストにあるきずなと一致

エペソ 4:2,3

本日の説教題、聖書箇所ともに今年の教会のテーマであり、指針聖句となっているところです。今年も残すところあと 4 ヶ月となりましたが今一度、今年の教会のテーマを確認し、主にあって実りある一年とさせていただきますたく願います。

パウロはこのエペソ書で教会のあるべき姿として教会が一致していることが最も大切なことであると語ります。1 節で「召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。」とされていますが「召される」つまり神が声をかけて招いてくださるのは何のためかと言うなら、一致を保つためだと言うのです。しかも、その一致はこちらとして何もしなくても与えられるものではなく 2,3 節にあるように「謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合うことによって」保たれるものなのです。

さらに一致が大切であるということはパウロだけでなく、いやパウロ以上に主イエス・キリストが教会の人に願い、祈っておられることが分かります。

「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。」ヨハネ 17:20~23

私達が一つになることによって、神は愛であり、その愛の神が私達の中にあることによって、キリストがその愛を伝えるためにおいでくださったことを知るのです。逆に言うと、私達の間的一致がありませんと、主の証を損なうのです。伝道の大きな妨げ、ブレーキがかかってしまいます。いろんな伝道の方策よりも、一致すること自体が大きな伝道の働きとなるのです。この一致を保ち、広げ、深めてゆきたいと思います。

さてでは一致とはどのような状態のことを言うのでしょうか？ パウロはここで、御霊の一致を作りなさい、とは語っていません。保ちなさいと書かれていますがそれは既に存在しているという前提で話されています。およそキリストを信じ、御霊を頂いているクリスチャンは同じ命によって生かされています。性別が違い、年齢が違い、文化や人種や言語が違っていても、主を信じる者たちは、不思議な共通性で結ばれています。それは同じ聖霊が、一人ひとりの心に宿り、同じ方向性へと導くからです。一致とは保たれるものであって、作り出すものではないわけですが私たちが考えたり、作り出そうとしている一致とはどのようなものなのでしょうか？私たちが一致を作ろうとすると必ず本人と違う価値観をもった人が出てきて、気になったり、イライラしたり、心にカチンとくることがあります。これはどちらが良いか悪いかという問題ではありません。ですからピリピの教会にも、コリントの教会にも、そしてこのエペソの教会にも一致をめぐる問題が出てきました。その後、4 章 11 節以下にはいろんな種類の賜物が出てきますがこれも素直に他人の賜物を喜んだり出来ず、かえって妬みが起きやすいというのが私たちの現

実ではないでしょうか？ それでは結局、私と同じ考え方になれ！と言っているに過ぎないことになります。

聖書にはこの一致を熱心に保ちなさいとあります。この熱心とは努力を払う、どんどんと進めるという意味がありますので努力を怠ったりすると消えたり、壊れたりするものであるということです。

これらのことからクリスチャンの一致とは自分で作り出すものではなく、すでにあるものを努力して守ったり、戦ったりするということになります。それは譬えて言うなら、私たちの間に灯る小さなともしびを外から来る嵐や雨からからだをはって守るということになります。御霊の一致は教会に、信じた者の群れの中にあるのです。しかし、それは消えやすいものなのです。私たちはその小さなともしびが保たれるように最大限の努力を払う必要があるのです。日々の歩みの中で何を保つために私のエネルギーを注いでいるのでしょうか？ ささやかなプライド、自慢ですか？

さてそれではどのようにして一致を保つのでしょうか？ 2節と3節の前半に、パウロは一致を保つために私達を取るべき態度を示しています。パウロは言います。「謙遜と柔和の限りを尽くし」と。謙遜とは、自分は罪深く卑しい人間だという深い自覚のことです。柔和とは、いらいらさせられる環境における自制のことです。しかもパウロは、適当な謙遜や柔和とは言いませんでした。「謙遜と柔和の限りを尽くし」と言います。徹底的な謙遜、徹底的な柔和のことです。ある目的をもつての謙遜の態度でもありません。「韓信の股くぐり」ということわざがありますが、これは、今は謙遜の態度を取るが、今に見ている、という将来の復讐を含んだ謙遜です。そのような報復的態度ではなく、人々の嘲りや無視に対しても、それを赦し、受け入れる謙遜と柔らかさを持ちたいものです。「自分は救われた、そして救われ続けている罪人に過ぎない」という謙りはいつでも根底に持っていたいものです。

次は「寛容を示し・・・」です。寛容とは、広い心の事です。自分と意見の違う人、物事の感じ方の違う人、趣味の違う人、物事の進め方のペースや方向の違う人、「馬の合わない」人を切り捨てないで受け入れる態度のことです。違うから遠ざけるのではなく、批判するのではなく、まして、排除するのではなく、違ったタイプの人からも多くを学ぶことが出来、彼らをうけいれることから自分も大きく成長できるのだという積極的な思考をしたいものです。

「愛をもって互いに忍び合い」が続きます。愛が忍び合うことに繋がるのは、パウロも人間性をよく観察していると思います。いやな人、自分にとって嬉しい存在ではない人、嬉しくない言葉や行いをなす人に対して愛を持って互いに忍び合うのだ、とパウロは言います。忍ぶとは我慢することよりも、もっと積極的です。お互いのいやな点を認め合いつつ、そこにキリストの愛を当てはめるのです。人間的な好き嫌いではなく、キリストがご自分を捨ててくださったその愛を与えていただいて、その愛を持っていやに見える人に接するのです。愛の反対は自己中心です。自分の物差しに合わなければ私に合わせろと要求します。神の愛は自己中心を砕き、乗り越えるものです。その愛をもって互いを忍びあうのです。

昔、私が幼い時や小学生の頃、時々、食卓に上るおかずや食べ物が少ない時に母親が「おかあちゃんええからこれ食べ」と言って子供に食べさせてくれたことがありました。その頃は単純に、「おかあちゃん、食べたないんや」とか「からだ大きいから食べなくても大丈夫なんや」と思っていました。大人になって、当たり前なことなのですがおかあちゃんは我慢してくれていたんやとか「からだ大きいから食べ

んでも大丈夫なんや、ではなく「からだが大きいからこそ、私たちよりももっと食べ物がひつようだったに違いない」と思うようになりました。でもなんでそうしてくれたのか？ それは自分がひもじい思いをすることによって、子供がひもじい思いを持たず、満足し、喜んでいる笑顔を見たかったからだと思うのです。主イエスは同じように自らが傷つき、忍ぶことによって、「あなたの受けるべき罪からの罰、それを私はすべて代わりに受けておきました。それは何よりも、罪赦され救われた人が主イエスを信じ受け入れることによって平安な喜びの中を歩むことができるからです。

キリストにあるきずなど一致を保ち、確認しながら主イエスのみあと、つまり主イエス様に従う歩みを続けてゆきたいと思います。